

僕のヒーローアカデミア～最強の呪術師に転生してハチャメチャするお話～

クロノヒメ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はい、自分勝手にやりたいクロスオーバーシリーズ第二弾です。

今回はヒロアカ×呪術廻戦です！

ヒロアカの世界線で、最強の呪術師がハチャメチャして生を謳歌します。

「大丈夫——僕、最強だから」

それでは皆さん、ゆっくりしていってね！

目次

番外編	五条悟の設定	1
始まり	始まり	1
人生式週目、スタート	人生式週目、スタート	11
賄作の決意、改め成長	賄作の決意、改め成長	14
受験と呪駆	受験と呪駆	24
最強と最強の談話	最強と最強の談話	37
正反対の目と眼	正反対の目と眼	43
知は力に勝る	知は力に勝る	50
格の違い	格の違い	54
親睦会	親睦会	57
委員長と謎	委員長と謎	62
過去と存在証明①	過去と存在証明①	66
過去と存在証明②	過去と存在証明②	71
過去と存在証明③	過去と存在証明③	74

番外編 五条悟の設定

どうも、作者の黒ノ姫でござります。

「僕のヒーローアカデミア最強の呪術師に転生してハチャメチャするお話」を読んでいただきありがとうございます！

この番外編では、作中でのなんだこれを作者が解説していくもので

す。

ネタバレを含むので、嫌なたは先に本編を見てから見ることを強くオススメします。

それではまず、自己紹介です。

本名	五条 悟
性別	男性
年齢	16歳（中身はもつといつてる。外見は28歳）
身長	190cm
所属	雄英高校ヒーロー科1A 雄英高校呪術科
1年教師	
等級	特級呪術師
好きな食べ物	甘いもの
個性・術式	「無下限呪術」「六眼」
説明	

見た目は五条、中身は転生者。

前世では高校生で、五条悟を漫画「呪術廻戦」にて知つており、カツコよすぎて惚れた人間の1人。

今はまだ五条悟を堪能している。

それでは、解説は質問応答のような感じでやつて行きましょう。

Q、なんでああいう口調なの？

A、五条悟はもともと「飄々として掴みどころがない。意味不明な言動や無駄に良いノリで周りを振り回し、周囲からは馬鹿呼ばわりされているなど、強さの割に風格がない」というような性格です。主人公はいつもこんな感じで五条を振舞つており、楽しんでいます。もちろん中の人にはたまに出てくるよ。

Q、呪力や術式つて？

A、呪力は自分の負の感情で生まれた負のエネルギー、術式は生まれた時に体に刻ませれている回路のようなものです。これに呪力を流す（または条件を満たす）と術式として効果を得られます。
また、呪術廻戦ではこれを家電と電気で説明しています。
電気（呪力）だけだと使いにくいので、それを家電（術式）に流すと使えるっていうイメージで大丈夫です。

Q、特級呪術師つて？

A、特級呪術師は、呪術師の中で実力がトップクラスの人を与える階級です。

なんと、五条を含め今はまだたったの4人しかいません。

Q、外見が28つて？

A、これは後で本編にできます。作者が頭を捻つて捻つてでた原作の五条を再現するための苦肉の策です。

Q、作中で沢山使っていた「トブ」とは？

A、飛んだ、つまりワープしたと考えてオッケーです。

A、なぜワープ出来た？と思いますが、これはまた別の機会に話しま

しょう。解説はかなり後になります。ごめんなさい

??注意??ここから難しい話になります。

分からぬ場合はコメントください。

Q、個性（術式）の「無下限呪術」って？

A、簡単にいうと、無限を現実に持つてくる術式。

五条に触れようとしても、無限が周りにあるので五条に近づく度にどんどん遅くなっています。

どゆこと？という人に例え話をします。

タイトルは「アキレウスと亀

アキレウスが100m先の亀をこす事が出来るかどうか、という話です。

普通、亀は越されるのでアキレウスの勝ちですよね？

しかし、ある人は亀が勝つと言いました。

その人が言うにはこうです。

アキレウスが100m先の亀のいるところにたどり着くころに、亀はのろのろとではありますが、少しあは進んでいます。

例えば10mとか。今度はアキレウスは10m先の亀を追いかけることになりますが、10m先の亀のいたところに着く頃には、亀はそれより1m先にいます。

また、その1m先の亀の位置にたどり着いたときには、亀は0.1m前に進んでいます。

これの繰り返しで、アキレウスは亀のもといた位置まで行くことはできません、のろのろと、でも確実に前に進んでいる亀に追いつくことはできないのです。

ですが、実際は追いつきますよね？

五条は、この追いつけない何か＝無限として捉え、それを現実にもつてくる術式なのです。

この無限のお陰で、四話のロボットからの拳を無効化しました。

Q、第四話の術式反転つて？

A、先程説明しましたが呪力って負のエネルギーなんですよね。なので自分の体を強化することは出来ても、治療することは出来ないんです。

体を再生するのは負ではなく正のエネルギーで治療することが出来ます。

さて、ここで中学校の数学の問題です。

負のエネルギーを正のエネルギーにする方法といえば？
そう、かけ算です。

呪力（マイナス）×呪力（マイナス）＝正のエネルギー
この方法を使うと、肉体の治療ができます。
といつても自分にしか出来ない人、他人しか出来ない人など様々な人がいます。

前置きが長くなりましたが、反転術式の解説です。

負のエネルギーが反転して正のエネルギーになつた呪力を、術式に流し込むと・・・。
なんと、逆の効果を発揮します。

五条の近づくほど収束する「無限」とは反対に。
触れた瞬間に距離を発散し、相手を凄まじい勢いで吹き飛ばす術式。

それが、術式反転 「赫」です。

ちなみに、見た目は赤い球体状です。
これでロボットを空高くまでぶち飛ばしました。

Q、サラツと書いてるけど術式の所の「六眼」つて？

A、五条悟の綺麗な青い目のことです。
効果は様々ですが、

- ① 「無下限呪術」の纖密な呪力操作を可能にする。
 - ② 相手の術式（個性）が分かる。
 - ③ 呪力を感知することが出来る。
- 以上のことが出来ます。

五条が最強の要因の1つと言つても過言じやないんでしょうか？

始まり

始まりは唐突だった。

中国の輕慶（けいけい）市で「発光する赤子」が目撃された。以降、世界各地で超常現象が報告され、世界総人口の約8割が超常能力である“個性”を持つような社会になった。

しかし一方で“個性”を悪用し、自分の望みや欲望を叶えるために使うもの・・・通称、敵（ヴィラン）が現れるようになつた。人々はそれらに恐怖を抱き恐怖したが、それは杞憂だつた。

なぜなら、“個性”を發揮し敵（ヴィラン）を取り締まる、英雄（ヒーロー）が現れたからだ。

ヒーローがいるおかげで、世の平穏は保たれていると言つてもいい。

――――――――――――――――――

呪術、という言葉を聞いたことがあるだろうか？

本来、それらは誰かを呪い、憎む術であると言われている。

そして、呪靈と言う言葉も聞いたことがあるだろうか？

文字通り、誰かが呪つたり、憎んだ末に出来た、幽靈のことである。

呪靈は一般市民には見えない。

さらに恐ろしいことに、呪靈は人に害をもたらすものである。突如消えた人間、バラバラになつた死体など・・・。

それらには、呪霊が深く関わってる場合が多い。
無論、それらに対抗する手段は少なからずある。
生まれもつた才能があり、呪力を培った人間・・・人はそれを「呪術師」と呼ぶ。

――――――――――――――――――――

この物語は

本来混ざることの無い

2つの世界が

混ざってしまった

とある世界線のお話

――――――――――――――――――

「あ、君転生ね」

「・・・は?」

開口一番に、知らない人から言われた言葉が転生してねだつた。
「・・・どういうことだ?・というか、こはどこだ」

「……」は「そうだな……君達人間が言うところの天国」

「ああ……そうなのか」

「でも無く地獄」

「…………」

「でもない所だよ☆」

「なんだこいつ」

「なんだこいつ

「冗談はさておき……君、死んだんだよねー」

「……あまり実感が湧かないな」

「うん。だつて君生きてるもん」

「…………」

「は？ 今お前死んだって……」

「言つたよ？ うん。死んだね」

「どつちなんだよ……」

「なんだこの女……疲れるなあ。

「……一応聞いとくけど死因は？」

「まあともかく、君はテンプレ……じゃないや、なんやかんやあつて転生することになったんだよー。いやー、良かつたね！」

「無視ですか。さいですか。

「おい、なんやかんやをもつと話せよ……」

「ええー？ いいじやん。めんどくさいし」

「めんどくさいって……」

「結構、いやかなり大事な話だと思うのだが……。

「どーもーかーく。早く転生する世界を決めてよー」

「ええ……（困惑）…………うーん……おい、神」

「お、よく私の正体がわかつたな……ふおつふおつふおつ

……突っ込みは放棄しよう。そうしよう。

「えーーーと……僕のヒーローアカデミアの世界に転生させてくれ」

「お、いいねえ。いいセンスだ……あ、能力もとい個性はどうするー？ 一応選べるよー？」

「つ?!いいのか!?

俺は座つてたイス（のようかなにか）から跳ねるようにたち、目の前の神様の肩を掴む。

「おう!?どうした青年!?

「本当に、なんでもいいのか!?

「・・・まあ、原作が崩壊しない程度には・・・」

「本当にか!?ありがとう神様!」

「お、おう・・・そんで、どんな個性にするんだい?」

「ああ。それは――」

俺は望む内容を話した。

「ふーん・・・まあいいんじやなーい?なんとかなるでしょー」

「よしつ!やつたぜ!」

「・・・にしても、なんでこの個性なの・・・?まあいつか」

そう言うと、目の前の神様は立ち上がり、右手を上げて振り下ろした。

すると、そこに白く輝いている扉が出来、そこをぐれと促してくれる。

「ありがとう神様!」

「別に感謝しなくてもいいよー。さ、さつさと入りなよ」

「おう!じゃあな!」

そう言って俺はジャンプしながら入る。

待つてろ、俺の理想の生活!

――――――――――――――――――

「・・・行つちゃつたかー」

そこに神は立つていた。

凄い笑顔で笑いながら、歓喜に満ちていた。

「感謝するのはこっちの方なのに・・・ふふふ」

「ま、新しい、短い人生を謳歌したまえ、青年。いや——」

——五条悟くん」

最強が今、現れる。

人生式週目、スタート

神様の扉をくぐった瞬間、大きな音と眩しさに息を飲んだ。
ああ、自分は転生したんだ——と、察することが出来た。

「無事産まれました！おめでとうござります！」

よく見えないが、多分すぐそこにいる医師がそんなことを言つたんだと思う。

・・・眠い。

今俺の体は胎児。赤ちゃん。

暗くなつていく意識の中、多分母親の声が聞こえた。

「この子の名前は——

悟。悟にするわ……！」

—————

まあ時が過ぎるのは当たり前だけど早く。

4年の月日が流れるなんて、造作もない事だつた。
もちろん、個性も発現した。

「先生……うちの子は……」

「大丈夫ですよ、奥さん。きちんと個性は発現しています
「ですが……」

・・・まあ、理解出来てないのも仕方ないとと思う。

五条 悟。

俺が好きな漫画「呪術廻戦」に出てくる、自他共に認める「最強」だ。
さて、そんな最強の人の個性だが……。
嬉しいことに、予想外なことに。

あの神様個性2つよこしゃがつた。

まあ、確かに2つ必要な訳だが……。
俺は一応能力を知っている。

あ、その前に呪術廻戦の世界について説明してなかつたな。
呪術廻戦の世界では、ざつくり言うと人の負の感情から出来た「呪
靈」と言われるものを、「呪術師」という呪術を使える人間が祓う（消
す）っていうものだ。

もちろん、五条 悟にも呪術の術式が生まれ持つてあるのだが……。
ぶつちやけ、チートレベルだ。

能力とかは……そうだな、いつか説明する。

そして、もうひとつ。

俺は多分転生補正があるから自分の呪力の量は目に見える。
だが、この世界で生まれて、俺はまだ呪霊を見ていない。
その一方、俺の家以外にも呪術が使える奴らがいる。
つまりだ。

この世界は今、「呪術が使えるが、本来使うべき対象がない」と言
うことになる。

・・・あれ？おかしいな。

まあ、それら全部「個性」という言葉に一括りされているのだが。
あ、あともうひとつ話してなかつたことがあつたな。
今後の方針だ。

まあ、決まつてるよなあ？

雄英高校に入学する！そんでもつて、青春を楽しむ！
あ、あと最強を満喫する。
待つてろ、俺の青春！

――――――――――――――――

人生上手く行かないんだなあ。

なんて、今日初めて保育園に行つてそう感じてしまった。

・・・まあ、見た目は4歳でも精神年齢がなあ・・・。
子供が沢山いるなか、1人だけおっさんてのもね・・・そりやあダメだよな・・・。

だが、嬉しいことに友達は出来た。

それが――

「ねーさとるくん！なにかであそぼーよ！」

みんな大好き耳郎 韶香ちゃんである。

ああああ！可愛ええんじやあ！

「そうだね・・・お絵描きでもしようか」

「うん！するー！」

かわいい。

多分どつかの誰かさんの粋な計らいだと思う。

が、ヒロアカ原作の人と友達になれたのは素直に嬉しい。

・・・裏を返すと、韶香ちゃんしか友達が出来なかつたんだけどね。
白髪高身長眼の色オサレ男子と仲良くなりたい人は少なかつたようだ。

ハツハツハ！・・・あれ？目から汗が・・・。

贋作の決意、改め成長

やはり時間が過ぎるのは早い。

時間が過ぎるのは早い。

保育園での日常は退屈だつた。それもそうだろう。

今更そんなことをやっても新しい発見がないし、なにより歳が歳だ。

いや、一概にもそつうは言えないが、どつちみち、暇だつたことには変わりなかつた。

・・・友達？え？響香ちゃんがなんだつて？

まあ（）想像の通り、友達と呼べるのは響香ちゃんぐらいしかない。

他の子とも仲良くしようとしたが、上手く行かなかつたんだ・・・。

ま、そんな」とより。

「さとるくーん！早く早くー！ウチたち、同じになれるかなあ？」

「うーん、どうだらうねえ？ま、一緒じゃないかなあ？」

「一緒にいい！」

横でぴょんぴょん跳ねる響香ちゃんを尻目に考える。

ちなみに言つておくが、変な事じやなくただ純粹に小学校のクラスについて言つてるだけで特に下心はない。

・・・ないからな！

――――――――――――――――――

小学校にて。

結局、僕と響香は同じクラスになつた。しかも隣の席。心の中でガツツポーズをとる。

「やつたねさとるくん！ウチたち一緒だよー！」

隣に座っている響香が嬉しそうにイヤホンを動かしている。

・・・あ、そうだ。今更ながらも響香ちゃんの個性について話しておこう。

響香ちゃんの個性は『イヤホンジャック』。

イヤホンの先端にあるあれを両耳から下げている。

見た目に反し、イヤホンをさしたところなら分厚い壁の向こうまで音が聞こえる。中々使い所がある個性だ。

だが人一倍耳の感度がいたため、大きすぎる音を聞くと耳がダメージをこう。

「そうだね、一緒でよかつたよ」

そんな日頃の小さなことで駄弁ついていると、教室の前からガラガラと、扉が開く音がする。

先生だろうか？という俺は教室の前を見て、二重の意味で驚いた。

1つ目は先生と思われる人物の方に、変なものが乗っていた。
人の頭1個分より小さい。が、その体色は淡い肌色で、何より体からみ出してる天使の羽が明らかに異形の存在であると語っていた。

俺はコイツを知っている。

呪術廻戦で出てくる、『呪い』だ。

名前は確か蠅頭ようとうと呼ばれている呪い……。

だが、それほど強い呪いでは無い。近くにいたり、憑いたりするとその人の体に悪影響……例えば、眠りが浅い、気分が悪い……など、それくらいしか影響は無い。

「……？どうしたの？さとるくん？そんな慌てた顔して？」

「……いや、なんでも」

ない、と言い切る前に。

俺は少し遅れて先生の顔を見た。

サングラスをかけ、髪は横と後ろを刈り上げ、髪を上に上げている。口周りにはヒゲがあり、ガツデム！と叫びそうな見た目だ……つて！

この人夜蛾やがまさみち 正道さんじゃないか！？

なんで!?あの人呪術学園の校長で五条悟のせんせ……

あ

そう言えば俺、五条悟じやん。

・・・までよ、ということはこの世界つて呪術廻戦の世界？いや、でも隣には響香ちゃんがいるし・・・。

まさか・・・。

なんて、ちょっと察したら。

『せいかあ～い！ヒロアカと呪術廻戦の要素、どつちも存在しちゃってるよー！いやー、これがホントのクロスオーバーつ、てね。良かつたねえーさどるくうん？』

ハデスう!?コイツ、脳内に直接!?

待て、ツツコミたいことが多すぎる。

1つずつ整理していくか・・・。まず、お前神か？

『いえす！I, m G O D!!』

あーはいはい。脳内で叫ぶなうるさい。んで、なんで急に話しかけて来たんだよ。

『ええ～？そんな冷淡なあ・・・まあいつか。えーとね、ちょっと大事なこと伝え忘れたんだよね～』

はあ・・・・。んで?あくしろよ。

『1つ目は、この世界のこと。既にお察しの通りヒロアカと呪術廻戦、本来混じることのないものが混ざっちゃったとんでもない世界線だね!。個性もあるし、術式も存在してるよ!。いやーすごいねえ』

・・・まあ、ちょっとはそんな気がしてた。
いやさ、たまにね?心霊スポットとかに黒ずくめの人達がいたから
さ・・・。
ん?というかそれならなんで俺は今まで呪いが見えてなかつたんだ?
だ?

『ふふ、君自分の呪力の量分かつてるの?』

今まで呪力が少なすぎて見えなかつたのか?
なるほどな・・・。

『んで、2つ目は・・・家に帰つたら分かるよ!。私からのプレゼント
だ』

うわあ・・・ろくでもなさそう。

『な、なにをー!・・・はあ。折角君を思つてプレゼントしたのに・・・』

・・・したの?

『いえす。もう君の家の机上にあるよ。ま、家に帰つてからのお楽し
みつてことでね』

はいはい。分かりましたよと。

『ああ、最後に言つておくけど』

ん？なんだよ急に改まって。

『君、今は最強じゃないからね』

・・・具体的に言うと？

『確かに五条悟と同じ能力を使える素質はあつても、磨かなきやただの石と同じことって意味だよ』

そりやあそудろうな。努力しなきや強くなれないなんて、そんなこと当たり前だろ。

・・・というか、そのために夜蛾さんがいるのでは？

神との脳内会話ではなく、当の本人に目を向ける。

ごつくも纖細で細かい動きが出来る右手を開いたまま肩まで持つていき、蠅頭の頭に乗せる。

・・・おい、もしかして
グチャツ

おーう。中々グロいな。

何が起こったのかは分かつたと思うが、夜蛾さんが握りつぶした。文字通り、グーを握るかのように。

『と、ゆうことでね』

ハイハイ。どーせ夜蛾さんに呪力教えてもらえつてことだろ。

『察しがいいな少年。賞味期限切れの牛乳でもあげようか？』

誰がいるんだよそんなもん。

『この世界で生き残れよ、五条悟?』

言いたいことを言つて、神様の声が聞こえなくなる。
・・・さあ、やるか。

「初めまして、このクラスの担任になつた夜蛾 正道だ。みんな、今日
からよろしくな」

「「「はーーーい！」」」

「うむー元氣があつていいな！・・・とりあえず、自己紹介しようか。
1番前の君から頼むぞ」

ビシツと俺に指を指す夜蛾さん。

机を引いて立ち上がり、先生の目を見て言う。

「五条悟です。これからよろしくお願ひします。夜蛾先生」

「」からだ。

まだ俺は五条悟じやない。

オシャレで、気楽で、最強じやない。

でも、素質があるつて。

言われたんだよ、神様に。

なら、不思議と出来るって思うんだよね。

という訳でカット！

え？と思うけど許してね♪これはまだプロローグに過ぎないんだよねー。

改めて・・・カットだよお！

——9年後

いつも通りコーヒーに角砂糖を6つドバドバと入れながら優雅な朝のティータイムを過ごす。

いつも通りなどと言つたが、実際は違うか。

呪術界ではいつも人手不足。こんな時間は無いようなもんだけどね。

そんなことも考えつつ、手で喜久福の抹茶生クリーム大福を頬張る。

うん美味しい。買ってきて良かつたねえ。

最近起こつた出来事を考えながら机の書類を整理し、伊地知の机に調べるもの دونつ、と乗せる。

がんばれ伊地知。

机に戻りコーヒーを飲み、顔を上げ時計を見る。

あ、気づいたらもう8時過ぎ。

僕は何も持たずに職員室を出る。

—————

AM：8時30分

扉を開け、教室の中に入る。

扉を開けた途端、メガネを掛け鋭く睨んでくる禪院 真希と狗卷いぬまき 棘、そしてパンダ。

彼らは五条悟の教え子達であり、全員が全員、とても優秀である。「おはよー。出席とるよー、うん、全員いるね。いやあ真希のことだから居ないと思つてたよ」

「ふざけんな、おせえよバカ。つーか3人しか居ねーんだからすぐ分かんだろ」

「まあまあ、そうカツカすんなよ真希。バカが遅れてくるのはいつものことだろ」

「しゃけ」

「酷いなー、皆して。そんなに僕のこと嫌いなの?ねえねえ、どうなの?ねえねえねえー」

「うざい」

「同意だな」

「しゃけ」

「ははは、みんなして冗談が上手くなつたなあ。可愛いもんだよ」と話す。さて、と話を切り変える。

「さて、いつも通り任務について貰うとして・・・」

椅子に座り机に手を組んで置き、いつになく真剣な顔で話す。空気を読んだのか、目の前にいる2人と1匹。

「僕さ、じつはこの春・・・」

そういういい伝えるか迷う——振りをしつつも心の中で早くこの事実を伝えたい。

「勿体ぶらず早く言えや」

「そうだぞそうだぞー」

「ツナマヨ」

「あのさ、僕・・・」

スウツと息を吸つて、言葉を吐き出す。

「この春、雄英高校ヒーロー科に受験します！いえーい！」

シーン・・・。

「・・・は？」

最初に真希が鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしている。

「・・・何言つてんの？」

パンダが冷静に五条に問う。

「おかげあ・・・」

え、なんでそう思つたの棘？

この後全員から質問攻めにあつちやつたよ。全く、これだからモテ

男は困るね。

「あ、そうそう。言い忘れてたけど僕まだ16歳だからね？」

「お前みたいな16歳がいてたまるかあ！」

真希とパンダの声が響く。

狗巻はどこか呆れた様子で「高菜」とおにぎりの具を呑いていた。

これは、そんな春の出来事である。

受験と呪験

始めてみんな、僕の名前は緑谷出久。みどりやいづく。

周りからどんなとか『デク』とか言われてるけど、この春雄英高校に受験する、中学三年生です。

小さい頃から僕は、誰もが憧れるN.O. 1ヒーロー「オールマイト」みたいな、カツコイイヒーローになりたいって思つてた。

個性が発現する4歳の頃、僕は病院で衝撃的なことを伝われた。

『これは今時珍しい“無個性”ですね』

目の前が真っ暗になった。

頭の中が真っ白になつた。

絶望が、僕を襲つた。

病院から帰つた後、いつも、ずーっと見てたオールマイトの映像を指さし、僕は言つたんだ、

『……お母さん。どんなに困つてる人でも、笑顔で救けちゃうんだよ……。超カッコイイヒーローさ。僕も、なれるかなあ』

お母さんからは泣いて謝られた。

僕よりも赤い目を、涙を流しながら、必死に細めて。

『ごめんねえ……ごめんね、出久う……』

あの時は今でもくつきり思い出せる。

人は、生まれながらに平等じやない。これが齢四歳にして知つた社会の現実。そして僕の、最初で最後の挫折だ。

そう、最後。僕の挫折は、諦めは。

僕は、知つたんだ。

無個性でもヒーローになれる。

信憑性の欠片も無い、そんな理不尽な言葉。

・・・でも、さ。

そんな言葉を、僕の憧れから言われたから。

僕は中学校の最後の春に、ヴィランに襲われた。

とつても苦しくて、死にそうで。

でも、オールマイトが助けてくれた。

その時、オールマイトの秘密を知ってしまったんだけども・・・。
小さい出来事だったんだけど、糺余曲折を得て言われたんだ。

『君はヒーローになれる』って。

僕はそれから努力し続けた。

朝早く起きて、ゴミばかりの海岸を掃除して。
学校では人一倍勉強に励んで。

夜も筋トレと受験勉強のオンパレードだった。
途中倒れてしまい、オールマイトに怒られた。

でも、僕は。

僕は、もつと努力しなきやいけないんだ！

無個性な僕は、人よりも、もつと、もつと努力しなきやいけないんだ！

だ！

雄英高校に受験する日、僕はやつと体が出来た。

分かりやすく言うと、オールマイトの個性を受け継ぐ器が出来たのだ。

オールマイトの個性。

それは、長年受け継がれてきたものらしい。

継ぐ。つまり、僕が次の後継者だということだ。

しかし、体が・・・器が出来てない体で受け継ぐと体が張り裂け、死ぬらしい。

個性を受け継ぐって言うのは初めて聞いた。

・・・もつとも、受け継ぐためにオールマイトの髪を吃べるとは思わなかつたけど・・・。

そして、受験当日。

(ここが雄英高校・・・！凄い迫力だ！)

僕にできるか？

そんな問、少し前の少年に聞けば首をブンブン振り、無理だと諦めていたに違いない。

だが、今は違う。

怖気なく足を1歩前にだし——

片方の足に引っかかる。

そのまま体が前に倒れ、刹那、少年は悟りの領域に至つたと言つてもいいだろう。

地面にぶつかる——と、思う前に体がビタつ、と止まる。

(え!?)

恐る恐る目だけを前に向けると、背が高く、全身を黒い服で身にまとつた大人……? がいた。

「だいじょーぶ? 君、怪我はあるかい?」

「えっ、あっ! 大丈夫です! すみません。あ、ありがとうございます!」

「へーきへーき。こんなところで躊躇には、まだ早いでしょ? ま、お互いヒーロー目指して頑張ろうか」

そう言い残すと、彼は僕の目の前から立ち去る。

そんな彼の言葉に元気を貰い、進もうとしてまた転び、次は少女に助けられたのは、また別のお話である。

—————

いえい! みんなのアイドルさとるんだぜ。

にしても、適当に突つ立つてたらまさか緑谷君に会えるとわね。驚きすぎて鼻歌を歌つちゃったよ。

さてさて、午前中で筆記は終わつたんだよねえ。

流石、と褒めてあげようかな? 倍率300。ま、宇宙の法則よりは簡単だつたけどね。

そして、今は実技……まあ、個性を使う実践訓練。

知ってるだろ？あれだよ、あれ。口ボツトをぶつ壊すやつ。いやあ、呪いを祓うんじゃないからね。まつたく、心が痛いよ僕は。あ、僕さ。前々からこの時にやりたいことがあつたんだよね。

「今日は俺のライヴにようこそー!!エヴァーバディセイハイ!!!」

「イエエエエエエイ!!!」

腹の底から楽しみ純度100%の声を出す。

これこれ、やつてみたかつたんだよねえ。

だが周りの人は無言無言。挙句の果てになんだコイツみたいな感じで見てくるよ。いやー寂しいね、悲しいね。まつたく・・・。

「おつと、コイツはシヴィー！でも1人いい反応したリスナーがいたな！センキュー！」

マイク片手にイカしたヒーロー、『プレゼント・マイク』がこちらを見上げる。

両の頬をニヤリと持ち上げ、軽く手を振る。
さて、あとは説明だし・・・。

いやー、説明中はなんか食べたりダメだしね。
早く甘いものが食べたいなあ・・・。

・・・あれ？どうしたのみんな立ち上がつて？

僕が辺りを見回すと、それぞれ自分が身につけている名札を見ている。

ああ、もう説明会終わつたんだ。

それじやあ・・・ひと暴れしちゃおつかなあ？

おつと、その前に。

やがて会場の外に出で、足跡の会場まで行くノハラを追つて、三井は電話をかける。

ブルルル・・・ブルルル・・・ブルルピツ。

「もちもちい？あたちごじょうー！いまひまあ!?」

「・・・はあ。なんですか、五条先生」

あれれ？ 可愛い猫の真似で言つたんだけどため息は酷くないかな

1

「いやー、僕今から実践なんだよねえ。いやあ、不安で不安で夜しか眠れなかつたよ。どう思う?」

まこと

「おつとおつとおつとつと。ちよつと待つてよ恵」

そん^ノ言^ハて 雷語の向^うにいる彼は語しかける
ふしごろ めぐみ。

波のお父さん……と言つてもあんな、この業ですう引

ズだつたけど・・・まあ、そんなやつと色々あつたんだよね。
ああ、一応言つとくけど恵は呪術師だよ。

ちょっとした補足だけど、恵の術式は呪術界の御三家の1つ、「禅院家」で引き継がれてる術式だね。ま、この辺りはいつか別の時に話そ
うか。

「頑張りなよ。恵」

珍しいですね。あなたがそんなこと『うの』

・・・・・五条先生も頑張つてください、又

「ふふつ、まあ頑張ることがあるなら僕も頑張るよー

ピツ・・・ツー、ツー・・・。

目の前には実践会場に向かうバス。それじゃ、行きますか。

おつと、会場に着くのは思つたより早かつたようだ。バスの外に出て優雅にあくびをしつつ、体を伸ばす。さて・・・と息を軽く吸い、ストレッチをしようとして――

あれ？あの子、どこかで見たような・・・。

んーっと、どこだつけ？いや、いつだつけなあ。

うーんと、幼稚園児の時かな？いや、小学生の時・・・？

黒髪ショートボブにスラリとした体。後ろから見たので顔は分からない。

モヤモヤを残しつつ、彼女に話しかける。

「ねえ、そこの君」

「・・・」

「おーい、もしもし？」

「・・・」

あらま。集中してらっしやる。

偉いねえ・・・。横目で見つつ、正面を向く。

僕はそーゆーの嫌いだからやらないけど、と1人心の中で笑う。

『ハイスタートー！』

「「「「え？」」「」」

空からプレゼント・マイクの声が響く。

どよめく生徒に呆れたように言葉を投げかける。

『どうしたあ!? 実践じやカウントなんざねえんだよ!! 走れ走れ!! 賽は投げられてんぞ!!』

ま、普通はそうだよね、と慌てふためき会場に全力で走っていくみ

んなを見て朗らかに笑みを零す。

僕はゆつくりいこうかな。ぶっちゃけ、雄英高校の教師つて立場だ
しなあ・・・。というか、まあ教師つてのは去年からやつてるんだけ
どね。

中学生で教師とか。うけるね。

五条自体、雄英高校に受かりたいとは思っている。

だが、前述の通りもう既に教師として働いている身としては意地で
も受かりたい、と言う訳では無いのである。
とは言うものの。

・・・・・・・・・。

「・・・はあ」

あーあ、と氣だるげに声を上げ、ある程度の呪力を体に纏わせそこ
そこ高い所にトぶ。

「入試の試験でロボットじゃなくて——」

呪術師になつてからいつも眼に付けている黒い布の位置を合わせ、
右手で印を組みつつ己の不満を口にする。

「——呪靈を祓うなんてね」

――――――――――――――――

高い高いビルの側。今も尚自分たちの未来を勝ち取るべき者達が
奮闘してる中、忍び寄るドス黒い影。

首をダランと下げ、限界まで開かれた目をギロギロと獲物に向かつ
つ、キンつ、とみずらの爪を太陽にあて生しく光らせる。

ニヤリと薄汚い笑みを浮かべたソレの鋭い爪は、しかし目の前の人
間に届くことは無かつた。

瞬間、ソレに訪れる永遠の暗闇。なにが起こつた?と考える間も無
くソレはもう既にこの世から消え、祓われているだろう。

脅威が立ち去つた人間の裏に、ちいさな声が響く。

「若人から青春を取り上げるなんて許されていないんだよ」、と。

素早く振り返るも、そこには何も無く、誰もいなかつた。

驚き数瞬悩むも、今は試験だとを思い出し、次の目標目掛けて走り
出した。

――――――――――――――

「さてと。そろそろ試験は終わり時じやない?ちょっととしたトラブル
もあつたけどなんとかなつたし。ま、僕がやるなら当たり前だけど
さ」

ビルの屋上に立ち、今も最後まで諦めず、必死に足搔く人を見つつ
そう独りごちる。

4級ぐらいの呪いはちらほら見る(ちゃんと祓つてある)けど、呪
力だけみると今回は3級くらいじやないかな?

だが、気になる点もある。

簡単簡単、イージー過ぎる、弱すぎる。

そんなことを考えていると・・・。

ズドオオオオオオン・・・

「へえ……こりやまた大層なもん作つたねえ。いくらで作つてんの？」

五条が今立つてゐるビルより高く、横幅もかなり広い超大型ロボットが会場を荒らしていた。

「そうだ、これ恵に送つたら喜ぶかな。男だからロボット好きでしょ」なんとただ自慢したいが為にスマホを片手にとる五条。

一方その頃、恵。

（受験……と言つても面接は終わつたしあとは家で本でも読むか……）家に着きリビングに向かう恵。

春と言つてもまだ肌寒く、体に堪えるわけではないがどうしても厚着をしてしまう。

リビングに着き服を脱ぐも、まだ暖房は付けていない。

「へつくしゅ！」

寒さか噂をされているのかは知らないがくしゃみをしてしまう。

ドツッ！

「へへへ！」

くしゃみをした反動で机の脚に小指をぶつける。

これは彼に起きたちよつとした不幸な話である。

この後、彼は家ではいつもスリッパを履くようになつたという。

そしてなんの因果性もない五条にイラッとしたが、いつもの事だと諦めた。

一方、そんな事が起つたなどと知らない五条は、キッチンとロボットを背に自分が半分以上写つてゐる写真を撮り恵に送る。

「うーん、イマイチだなあ……」

そうだ、と口にして超大型ロボットのすぐ近くにトぶ。

・・・おつと、写真写真と。

カシャツ

この位の迫力なら、恵に自慢出来るでしょ、といい去ろうとするが、ロボットの前に転んでる人を発見する。

よく見ると、開始前にいたボブ少女。
動く気配が無いので話かけてみる。

「ねえ、そこの君」

なにしてんの？なんて悠長なことを言う前に――

「は？」

素つ頓狂な声を上げる。

2つの意味で驚く。

目の前の少女は、動かなかつたんじゃない。動けなかつたのだ。華奢な体からは鮮血を振りまき、落ちてきた鉄筋コンクリートであろうものが足を貫通し、地面に貼り付けられている。

五条はこの試験を甘く見ていた。

雄英高校、倍率300を誇るヒーロー科の入試。

誰かが怪我を負うにしろ、死ぬ程の傷は負わないと思っていた。だが目の前の彼女はどうだ？

そして、もう1つ。

黒い髪のショートボブ、ロツクな服装にスラリとした体、発展していない胸。

一番の特徴は両耳から垂れたイヤホンジャック。

なぜ、今まで忘れていた？

僕の大事な友達、そして、たつた1人の幼なじみ。

「・・・!?君、ウチのことはいいから、早く逃げてっ！」

まだ彼女は生きている。

自分の心配よりも、今も尚現在進行形で危険が迫っている彼女が、僕の心配をした。

自然と笑みが零れる。

初めて彼女と会った時のような僕らしい笑顔で語る。

「大丈夫――僕、最強だから」

巨大ロボットが大きな拳を大きく振り上げ、そのまま振り下ろす。

風を切る轟音、巨大な質量が降り注ぐ。

彼女は恐怖故か、悲鳴を上げ目を閉じる。

その場にいた男に触れる——直前。

ビタつ!!!

彼が手を上げ、その手にロボットの巨大な拳が触れる寸前で止まる。否、止まつてはいない。

見えないが、ゆつくりと、ゆつくりとだが確実に距離を縮める。そんなものを意に介さず、安心させる様に語りかける。

「僕の術……じゃない、個性はね」「つ!?こんな時にいつたいなに!?!?」

「本来至る所にある無限を現実に持つてくるだけ」

「・・・!?

「さて、問題」

巨大ロボットは困惑しているようだが、自身に刻まれた命令に背かず、また拳を高く振り上げる。

高く、高く。天にまで届くように。

『収束』と『発散』

右手の人差し指を立て、術式を発動させる。

人差し指の方に呪力が渦巻いて集まつて行く。

やがてそれは球体になり、まるでバスケットボールくらいの大きさの火星のようになつている。

「この虚空に触れたらどうなると思う?」

再度、ゴオツ!と風を切る音が訪れる。

愚直にもまた振り下ろされた拳に対し五条は、右手を上げるだけに済ませる。

拳が五条の先にある球体に触れるその刹那、五条は笑っていた。凄惨に、ザマア見ると言わんばかりの笑みを浮かべ、己の術名を心

の中で声にした。

術式　反転　「赫」

巨大ロボットが赤い球体に触れる。

その瞬間、閃光が爆ぜ、今まで収束していた無限が発散される。

バアアアアアン!!!

巨大ロボットが振り下ろした拳が逆再生されるように上に吹つ飛ばされ、あまりにも強い威力により鋼鉄で出来た頑丈なロボットの腕が引きちぎれた。

だが、それだけでは終わらない。

腕が引きちぎれても尚もその威力は衰えず、ロボットは更に吹つ飛ばされる。

やがて数トンはあろう巨体全てを浮かしきり、上昇はそこで終わる。

「あ、そういえば」

先程の拳より更に大きい音を立てつつ落ちる巨大ロボットを見つ

つ、五条は言う。

「落ちることは考えてなかつた」

ズドオオオオオオン!!!

「おつとつと。瞬間にトندいて良かつた。・・・おーい、響香」

ロボットが落ちる時、咄嗟にボブ少女をお姫様抱っこした五条は、被害が無さそうなビルにトんだ。

彼女の足・・・ふくらはぎに刺さっていた先が鋭い鉄筋コンクリートを抜き、今は五条の呪力により血が出るのを防いでいる。

一方彼女は目を見開いて口を大きくあけ、あまりにも多い情報量を処理しきれていないようだ。

「・・・ま、いつか」

『終了了了!』と遠くから響くプレゼント・マイクの声を聞きつつ、五条は目の前の少女を救えたことによる安堵と先の戦闘での高揚感をまだ肌寒い季節の風で冷ましていた。

最強と最強の談話

ある日の夕暮れ時。

教師という役割を果たし、あまり馴染みのないみずらの家の帰路に着いた五条はいつもならブラブラと文字通り道草を食つて帰るのだが、この日は違つた。

雄英高校、もとい呪術科はとてもなく広い雄英の敷地内にある。というより、分けられている。

敷地内の四分の一、とは言えその光景は圧巻であり、多くの和風の建築物や神社仏閣、果てには五重塔みたいなものまである。

その奥に雄英高校呪術科、また別の名を都立呪術高等専門学校と呼ばれている。

前者は一部のヒーローやその卵、後者は呪術師がそう呼んでいる。話は戻るが、五条 悟は家に帰つている途中である。

もつとも、家と言うよりは家という機能を果たしている場所である。

ただでさえ人がいないこの業界では仕事が多い。

特級術士程になれば自分の家に帰らないことなどざらにある。

・・・脱線してしまつたが、あの五条 悟は珍しく家に帰つた。

玄関の扉を開け、家の中に入る。

靴を脱ぎ優雅な足取りでなかに甘味しかない冷蔵庫を開け、中からバニラアイス、メロンソーダを取り出し殺風景な部屋のテーブルにそれらを乗せる。

五条 悟は甘党である。

しかもかなりの甘党であり、彼を知る人物からは大きくなつた子供という印象がある。

といつても、その印象は食事だけなのだが。

さて食べようと思った時、テーブルの上に封筒があるので、見てつけ

る。

雄英高校の文字が印刷されており、どうやら先の試験の結果である事は一目瞭然だつた。

なにこれ？と思いつつも手を伸ばし封を切る。

すると中から謎の機械が出てくる。

見ると機械は円形で窪んでおり、見ると底にはレンズがハメられてあつた。

付いているボタンを押すと機械から光が溢れ、その場でスクリーンを作り出す。

映し出されたものに映つていたのは――

「これはこれは、N o . 1ヒーローのオールマイトじゃないの」

そう。

世界の誰しもが認める英雄、オールマイトが映つっていたのである。『私が投影されたッ!! ハツハツハ、g o o d n i g h t 五条君』「g o o d n i g h t オールマイト。それにしても、僕並に暇がないヒーローがどうしてスーツを着込んで目の前にいるのかな?』『ん~! 相変わらず君は飄々としてるね! 流石はそつちの世界のヒーローだ』

「当たり前でしょ。だつて僕だよ? 天才イケメン特級呪術師の五条悟さんだよ?」

『ハツハツハ! それもそうだね!』

オールマイトと五条。

2人には少なからず接点はあるが、今は置いておこう。

『それで? って聞くのもナンセンスなもんか。大方、今から始まるのは受験の合否発表つてところかな?』

『Y E S ッ! その通りだ!』

そこで息を吸い、結果をペラペラと言つていく。

『受験点数はギリギリセーフ。でも実技はほとんどロボットを倒していない。もちろん、不合格だ』

続いて言おうとするオールマイトにすかさず言葉を挟み込む。

「でも実際は合格。でしょ? オールマイト」

『ツ？？？君は何故それを知っているんだい？』

オールマイトの雰囲気が変わり、眞面目真剣モードになる。

五条はソファラーに手をかけ上を見上げため息をつく。

「自分がヒーローと同じ体でやる模擬市街地演習。僕は実践的だと思うんだよね。ロボットをヴィランに見立て、尚且つ

カラシッ、と氷の音がする。

「周りがピンチ、そしてそれを救つた者には別ポイントがある。そういううだう、オールマイト？」

『・・・君には全てお見通し、つて訳かい？』

「ご生憎様、眼がいいもんでは！」

『そう！先の入試、君が言う通り見ていたのは敵ポイントのみにあります！』

オールマイトの姿が変わり、薄暗い部屋の中に切り替わる。

そこにはテレビが複数台置いてあり、見る限りだとその全てに模擬演習の映像が映つており、それを眺める教師一員と、見たことがある人物を見つけ、五条はどおりで試験の場にあるカラスが沢山いた訳だと納得した。

高かついたであろう値段を考えると、スケールの違いを思い知らさせること。

などと言っているが、この男も稼ぎは十分、いや、かなり良いのである。

「人助け、言つてしまえばヒーローにとつて正しいことをしたものを受け否定するヒーロー科なんて」

『――あつてたまるかつて話だよ！』

『レスキュー・ポイント救命活動P！しかも審査制！我々雄英が見ていたもう1つの基礎能力！』

『五条 悟 96点！敵ポイントと合わせて100点！この数字は雄英高校の入試で初めての3桁台だよ。もう君プロヒーローでいいんじゃないかな？』

呆れた半分でオールマイトがありのままのことを口走る。

実際、普通の人間はそう思うだろう。この試験はまだヒーローの卵である者たちが行うもので、ぶつちぎり最高得点を出しているのである。

五条はいつも通り当たり前に思う。流石僕と。

だが、今回ばかりはおかしすぎる。

「それにしても、なんでこんなに高いの？僕、そんなにレスキューしないよ？」

『出血している少女を助け、更にあの超大型巨大ロボットをぶつ飛ばしたのは久しく見ていないらしいからね。でも今回は君以外にもう1人いたんだよ。今年は豊作だと他の先生方もそう言っていたよ』
「へえ……僕以外にもそんなことをしたのがいるんだ。レベルが高くて上々。やっぱ最近のヒーロー界も質が良くなってきたてるね」

『何はどうあれ……合格おめでとう、五条君。』

ピツ、と音を出して機械が役目を終え停止する。

ポケットからスマホを取り出し電話をかける。

数コールした後、イライラしたような声で電話の向こうから応答があつた。

『……なんですか五条先生』

『お疲れ恵。さて、いい報告といい報告、どっちから聞きたい？』

どちらも同じではないか、何が言いたいんだこの先生は、と伏黒は思つた。

『はあ……それじやあいい方からでいいですよ。なんですか？』

「僕、雄英高校ヒーロー科に受かつたよ」

『……は？本当ですか？』

「マジだよマジ。ああ、そしてもう一つの嬉しいことはね』

『つ、は、はい』

「僕、今年の君の学年の担当だから。つまりど、ころ1年生の先生だね。感謝していいよ？なんてつたつて天才イケメン特級呪術師の五条悟が先生なんだからね」

『……………』

ツ、ツー、ツー、ツー・・・。

「あれ？切れちゃつた？」

まあいいか、といいアイスを食べる。やつぱり甘いものは美味しい。

五条の報告を聞いた次の日、伏黒は胃薬を箱買いした。

――――――――――――――――――――――

時はオールマイトが五条に合格を報告した所まで遡る。
久しぶりにあつた彼は、前に会つた時とほとんど変わつていなかつた。元気に過ごしていたようだ。

ふと、実技総合成績が出たときの反応を思い出す。

『爆豪勝己、まさか救命活動P0で2位とはなあ！』

『1ポイント^{仮想}』『2ポイント^ラ』は標的を補足し追跡してくる

『派手な個性で寄せ付け迎撃し続けた。タフネスの賜物だな』

『緑谷出久、対象的に彼は敵P0で8位。^{超大型巨大ロボット}アレに立ち向かつたのは過去にもいたけど、まさかブツ殺しちゃつたのは久しく見てないね』

他にも評論していく教師達だが、やがて1人の生徒に辿り着く。

『そして何より・・・今回の1位』

『8位と似ててほとんど救命活動Pでランクイン・・・』

『アレを思いつきりブツ殺しつつ、更に他のピンチの生徒を救助して応急処置までこなした』

『そして何より・・・』

『『『呪靈を祓つた』』』

『これに関してはあの場で祓えるのは1位しかいなかつたからな・・・』
『それにしてもいいのか？ アイツ、呪術科の教師なんだろ？ ぜつ

てえー16歳じやねえだろ?』

『だが、国の記録にはそう書かれているからなあ』

結局入学が決まつたのだが、オールマイトは考えていた。

先程の会話で聞こうとしたが、あと少しで口から出そうだつたが、出てこなかつた。

——君は何故、ヒーロー科に入ろうと思つたんだい？

正反対の目と眼

春。

いつもより早く起きて、憧れの学校へ登校するための準備を済まして靴紐を結ぶ。

「出久！ テイツシユ持つた!?」

「うん」

「ハンカチ！ ハンカチは!?」

「うん！ 持ってるよ！」

「出久！」

「なアにイ！」

「超カツコイイよ」

「・・・！ 行ってきます！」

僕です、緑谷出久です。

雄英高校に受験をして、一悶着ありながらもなんとか合格することができました。

(それにも・・・)

「広すぎる・・・」

思わず声に出てしまう。だが、それも仕方の無いことだと自身に納得させる。

見た目通り広いことは、どうやら教室の移動にも一苦労するみたいだ。

そうこうしているうちに、僕のクラスの1—Aの扉が見えてきた。

(あの受験者数から選ばれた人たち・・・。怖い人たち・・・)

脳裏には幼い頃からの同級生で僕のことをいじめていた「爆豪勝己」と、入試前に怖いと思つた名も知らない男の人が浮かんだ。(クラスが違うとありがた)

「机に足をかけるな！雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないのか!?」

「思わねーよ！あ、あ、!?」

(あ、終わった)

「あ！そのモサモサ頭は！」

声が聞こえ後ろを振り向くと、雄英高校の玄関前で転びそうだった僕を助けてくれたいい人が佇んでいた。

「地味めの！よかつた、合格出来たんだね！」

「いや！あのつ・・・！ほんとうにあなたの直談判のおかで・・・！」

「あれ？なんで知ってるの？」

不思議そうな顔をするも、「あ、そうだ」と気になる話題を降つくる。

「今日つて式とかガイダンスだけかな？先生とかつてどんな人なんだろうね。緊張するよね」

これまでの人生的に女子とほとんど話したことがない出久は、頭を素早く回転させ言葉を発つしようと思ったが、その前に目の前のいい人の向こう側から疲れたような、面倒くさそうにしている声が聞こえた。

「お友達ごつこがしたいなら他所へ行け・・・」

誰だろうと目線をずらすと、クラスの扉の向こう側、つまり廊下に寝袋で寝そべっている男の人がいた。

「こゝはヒーロー科だぞ」

そう言うと手に持っていたゼリー飲料を一瞬で飲み、瞬きをする前に圧縮されたように袋が縮んでしまった。

(((なんか!!!いるう!!!)))

「はい、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠けるよ」

担任の先生であろうということはプロヒーローのはずなのだが、ほぼ全てのヒーローを知り尽くしている緑谷出久が見たことがないと言いきれる。

「担任の相澤 消太だ。よろしくね」

クラス内にどよめきが起きる。

目の前の先生はモゾモゾと寝袋から出て、生徒用の体育着を手に持ちながら相変わらず氣だるそうに指示を出した。

「早速だがこれ着てグラウンドへ出ろ」

――――――――――――――――――

「 「 「 個性把握テストお!? 」 」 」

体育着に着替え、グラウンドに着いた時相澤先生は開口1番にそう言つてきた。

「入学式は!? ガイダンスは!?」

生徒たちの声をバツサリ切るように。

「ヒーローになるならそんな悠長な行事、出る時間はないよー」

そういう、手に持つているスマホの画面を見せてくる。

「個性使用禁止の体力テスト。入試の1位・・・」

相澤先生はキヨロキヨロと周りを見渡し、ため息をつく。
「おい爆豪、中学の時ソフトボール投げ何メートルだつた」

「・・・ 67メートル」

「じゃあ、個性を使ってやつてみろ。円から出なきや何してもいい。
思いつきりな」

そう言うとボールを手渡し、爆豪に早く投げるよう催促する。
爆豪は軽くストレッチし、ボールを全力で投げる。

「死ねえええ!!」

・・・ 死ね?

「まず自分の最低限を知れ」

すると、相澤先生の持っていたスマホに『705. 2m』と文字が現れる。

「 「 「 うおおおお！」 「

「なにこれ、面白そう！」

「個性思いつきり使えんだ！さつすがヒーロー科あ！」

「・・・面白そう、か」

ニヤリ、と先生が薄く笑う。

「ヒーローになるため3年間、そんな腹積もりでいるのかい」

直後、とんでもない提案をする。

「・・・よし、8種目トータル成績最下の者は見込み無しと判断し、除籍処分としよう」

「 「 「はああああ?!?」 」 」

「生徒の如何は俺たちの自由。ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ！」

そんな雰囲気を壊すように。

「あ、ごめん。遅れちゃつた」

「ツ!？」

その場にいた全員が驚く。

背は高く綺麗な白髪、そして体育着ではなく黒の少し暖かいのに長袖、それも首が見えないくらいである。

何より特徴的なのは眼だ。

とは言つたものの、謎の黒い布により隠されている。

しかし、相澤先生は先程同様、いや、先程よりも深いため息を吐く。
「遅刻だ、五条 悟。その遅刻する癖を直せといつも言われてると思うが」

「別にいいでしょ、それくらい。あんまり考えすぎちゃうと胃薬を箱

買いして新しいルーティーンが出来ちゃうよ？」

「言つておくが、今はお前を生徒として扱うぞ」

「はいはい、ごめんねせんせ」

ハツキリ言つて、直す気はない。

「なんだこいつ!? 遅刻か!？」

「先生に対してなんていう口の聞き方ですの?」

切島 八百万がそうツッコむ。

「五条 悟。入試の実技試験では100P、入試1位だざわめきが起きる。

遅刻をし、先生に舐めた口を聞くこんな奴が入試1位?だが、1人、いや2人違つた。

「こいつが・・・」

爆豪が睨み直す。

もう1人は口を開き驚いてはいるも、他とは違うことを考えていた。

その1人とは、耳郎 韶香である。

「時間が無い。早速個性把握テストをやるぞ」

相澤先生は諦めつつ、先に進む。

――――――――――――――――――――

みんな！お疲れサマーランチ。

呪靈を払つていたら遅刻した五条でーす。あーミ〇ドのドーナツ美味しかった。

さてさて、今は個性把握テストこと体力測定をやるんだつてね。まあ結果をパパッと上げていこうかな。

第1種目 50メートル走 : トんだため0, 1秒

第2種目 握力 : 無限で圧縮した結果、壊れたため測定不能

第3種目 反復横跳び : 普通にやつて90回

第4種目 ソフトボール投げ : 地面すれすれまで落ちるけど浮いているので無限

第5種目 立ち幅跳び : 落ちないため無限

第6種目 長座体前屈 : 普通にやつて70cm

第7種目 持久走 : トんだため0, 1秒

第8種目 上体起こし : 普通にやつて50回

・・・と、まあこんな感じだったよ。

まあ、僕がやるんだからこんなもんだよね。

それにして相澤先生も悪い人だよ、最下位は除籍処分するのは嘘だつて言うなんて。ひどい先生だなあ。

さて、次の授業でも行こうか。

「ねえ・・・あのさ」

後ろから少女に声をかけられる。振り返ると、そこには響香がいた。

「あ、響香。どうしたの？お腹空いた？」

「空いてない。・・・じゃなくて、あんたやつぱり」

「五条悟だよ？あれれ？覚えてない？まあ仕方ないか。小学校ぶりだもんね、それにしても大きくなつたねきよ」「なんで」

響香の顔を見る。

「なんで、あんたがここにいるの・・・？」

「ん？なんでつて？」

「だつてあの時あんたは」

「おいお前ら、何してる。早く次の授業に行け」

ヒュー、相澤先生。タイミングがいいのか悪いのか分かんないね。

「それと五条、お前は少し残れ」

「はいはーい。じや、また後で別の時にゆつくり話そうか。響香」
去り際にどこか困惑して、苦痛に顔を歪ませている響香の顔が頭に残つた。

「それで、どうしたの相澤先生？なんか用事でもある？」

「・・・ハア、全く合理性に欠けるよ。もつと協調性をもてよ五条 悟」

「はは、まあ個性つて事でいいんじゃない？そんな苦労しないでしょ」

「・・・ホント、お前に任せるのが不安になつてくるよ。ちやんとしろよ、五条」

「当たり前でしょ？ま、任せっきりなよ。この五条 悟さんには」

不安しか感じない相澤先生であつた。

知は力に勝る

雄英高校はプロヒーローを多く排出する一方、一応列記とした高校である。

「んじゃ次の英文のうち間違っているのは?」

午前は必修科目とか英語等の普通の授業。僕は結構好きだけどね。

「おらエヴィバディヘンズアップ盛り上がり———!!」

(（（ 普通だ））)

(クソつまんねえ)

昼は大食堂で一流の料理を安価で頂ける。

「ランチラッシュ、五条特別定食でよろしく」

「了解!君も好きだね!」

ポン、とアイスクリーム、ポ○キーなど子供の夢がてんこ盛りされたパフェが出される。

(（（てい・・・しょく?））)

そして、みんなが待ちに待つたであろう午後の授業。

ヒーロー基礎学。

でもその前に。

扉を軽快にあけ、元気よく教室に入る。

「やつほーみんな、僕だよ」

「さ、悟くん!」

「お、出久くんいい反応だね」

「五条くん、これは一体どうゆうことだ。僕達は今からヒーロー基礎学の授業を受ける筈だが……」

「ははつ、まあ落ち着きなつて。そうだね、とりあえずおさらいでもしようか。まずは僕の話を聞いてくれるかな?」

手に持っていた箱を教卓におき、質問をする。

中には4級呪霊の蠅頭が入っている。

「それじゃ問題。日本国内での犯罪率は一体、おおよそ何が原因で起
こつてる?」

「・・・ヴィランだろ」

勝己がそう答える。

「うん、そうだね。概ね合っているよ」

一呼吸置いて語り続ける。

「でも、それ以外でも事件があるんだよね」

「日本国内での怪死者、行方不明者は年平均10,000人を超える。そのほとんどが人の肉体から抜け出た負の感情、『呪い』の被害だ」

「は？ ちょっと待てってどうゆう事だよ!?」

「ケロ。何をいつているのかしら？」

銳兎郎、梅雨がもつともなことを言う。

「まあ百聞は一見にしかず、と言う訳で」

先程教卓において箱を開け、中から檻をだす。

「・・・？ 悟くん、それは？」

「さてさて、みんなにはこれが何に見える？」

「なにって、ただの小さい檻じやねえか？」

「そうだね・・・あ、勝己ちょっとこれかけて」

そういう、呪霊が見えるようになる眼鏡を渡す。

「んだこれ、だせえな・・・」

そう言いつつしぶしぶといった様子でかける勝己。

その瞳が訝しげなものから驚愕に染まるのに時間はからなかつた。

「おい・・・！なんなんだよコイツ・・・！」

「じゃ、眼鏡みんなに回してね」

1人1人にメガネを支給し、全員が檻の中に入っている蝇頭を見て様々な反応をする。

「さて、ご覧いただいたようにこれが呪霊と呼ばれるもの。ああ、その眼鏡は今日から君達のものだから、大切に扱つてね」

「なるほど。質問ですが五条さん、貴方は一体何者なんですか？ 私達は今日その呪霊とやらを知りましたが、貴方はなぜそのような事に詳しいのですか？」

百がそう聞いてくる。流石推薦組の一人。頭がいい。

「（）雄英高校ではヒーロー科、普通科、経営科、サポート科があるん
だけど、実はもうひとつあるんだよね」

白のチョークを手に持ち、黒板に文字を書く。

「ヴィランや災害と同じように理不尽な呪いに対抗するために、人類
も呪いを使うことにした。そしてそれを育成するのが（）、雄英高校

呪術科つてわけ」

「とは言つたもののヒーローとして君達は生きていくわけで、そうし
たら必ずと言つてもいいほど呪霊と遭遇するんだよね。もし、万が一
その時が起こつた時のために知識や対処方法を教えるのが、僕の仕
事」

さて、と呟く。

『雄英高校ヒーロー科もとい呪術師教師 五条悟』

黒板に文字を書き終え、チョークを元の場所におく。

「みんな、改めてよろしくね。ああ、この時は気軽に五条先生つて呼ん
でいいよ。普通の時は好きなように呼んでね」
はは、みんな口を大きく広げて面白いなあ。

「何か質問がある人はいるかな？」

はい、と緑谷くんが手を上げる。

「あの、このことは他のヒーローも知ってるんですか？」

「Y E S。プロヒーローなら誰でも知ってるよ。他には？」

「その呪霊つてやつとは戦えんのか？」

勝己がそう聞いてくる。

「基本は戦わないかな。というより今はまだ君達じや戦えない、戦う
術がないからね。さて、これ以上はまた次の授業から話していこうか
な。こんな感じで君達に呪術の基礎知識を教えていくよ。．．．そろ
そろかな」

みんなの顔が困惑に変わる。

「まああくまで知識として今は教えるから、実践的なことはかなり後
で教えるよ。それよりも、今は何の時間だつけ？出久」

「えつと、ヒーロー基礎学？」

「わーたーしーがー！」

「この声は！」

「普通にドアから来たー！」

オールマイトが丁寧にドアをあけ、教室に入つてくる。

「オールマイトだ！ すげえや、本当に先生やつてるんだな！」

つかつかと歩みよるヒーローに笑みを浮かべながら話す。

「というわけで僕の授業はここまで。オールマイト、後は任せたよ」

「分かつたよ、五条くん」

コホン、と咳き込みオールマイトが黒板の前でこれからやることを解説する。

「ヒーロー基礎学！ ヒーローの素地を作るため、様々な訓練を行う科目だ！」

そして手から『B A T T L』と書いた札を取り出し手に持つ。

「早速たが今日はこれ！ 戰闘訓練！」

「戦闘・・・訓練・・・！」

「入学前に送つてもうつた個性届と要望に沿つてあつらえた、戦闘服！」

「「「おおお!!!」」」

「さあ少年少女達！ 戰闘服に着替え順次グラウンド・βに集まるんだ！！！」

全員が全員、色とりどりの服装に着替えるなか、オールマイトと五条悟は共にグラウンドに向かつていった。

「しかし、また君と共に授業をするとはね。案外分からないものだな」「確かに、あの頃は立場が逆だったからね。オールマイトも呪霊を楽々扱えるようになつたでしょ？」

「天才特級呪術師のおかげだよ」

「はは、N o. 1ヒーローにそう言つて貰えるのは光榮だね」

「あ、そうそう。戦闘訓練にはもちろん君もやつてもらうからね」「マジ？」

格の違い

「始めようか有精卵ども!!! 戦闘訓練のお時間だ!!!」

オールマイトがそう言うと、各々様々色彩に彩られたヒーローコスチュームを着て出てくる。

被服控除。入学前に「個性届」、「身体情報」を提出すると、学校専属のサポート会社がコスチュームを用意してくれるというとてもありがたいシステムなのだ。

だが、あくまでヒーローだけのものであり呪術師にそれと言うようなものは無い。

「先生！……」は入試の演習場ですがまた市街地演習を行うのでしょ
うか？』

体全体がスリムなコスチュームを着た飯田が疑問を口に出す。

対するオールマイトの答えはと言うと。

「いいや、もう2歩先に踏み込む！屋内での対人戦闘訓練さ！」

まとめるど、2対2に別れ、ヴィラン側がビルの中にある核兵器を守り、ヒーロー側がそれを処理すると言う訓練である。

「コンビ及び対戦相手はくじで決める！」

そう言うと中身が見えない箱をだし、みんなに引かせる。
皆が皆様々な反応をするなかで、この男は違つた。

「オールマイト？僕のくじだけなんにも書いてないけど？」

そう、五条悟のくじだけ何も書かれておらず、真っ白だったのだ。
「むむ、まさか君がそれを引くとはね。実は今回の授業は人数の都合上1人余るんだが、私と組もうと考えてたんだが……」

そこまで言つたとき、五条は手をひらひらさせながら笑う。

「あー別に1人でいいよオールマイト」

「1人でつて……大丈夫なの？五条くん？」

心配そうに緑谷が聞いてくる。

ヒーローの卵といえどその実力は低い訳ではない。

「うんへーきへーき。なんとかなるよ」

どことなく嫌な予感がする緑谷だつた。

呪術科1年担当の五条悟です。お疲れサマーランド！始まつた戦闘訓練、最初は出久対勝己のペアだそうで。今は訓練が終わつたけど、はつきり言つて眞面目過ぎるね2人とも。

バカ正直に突つ込むことなんて、4級に満たない呪靈でも出来る。だけど面白いものを見せてもらつた。

それにも百は酷いね。結構ボロボロに言つてたよ。まあ実際に的を得る発言だつたけど。

そこからはまた訓練、講評を繰り返し。

さて、いよいよ最後の訓練だな！五条くんには挑戦制でやつて貰おうか！

「挑戦制……ですか？」

「その通り！組み分けは自由で構わない。だが、五条くんにはヒーロー側でやつて貰うけどね」

「はいはいおーけーおーけー。早く決めなきや時間がなくなつちやうよー」

何処までも他人事の五条。

だが、立候補は案外早く決まつた。

「俺にやらせてくれ」

「……俺もやる」

推薦で入つた焦凍と若干萎え気味の勝己。

「ん。じゃあやろうか」

先にモニタールームを後にする2人に五条は声を掛ける。

「あ、そうそう。折角だしハンデ付けよつか」

疑問符を載せた2人にハンデの内容を言う。

「僕に触れたら君達の勝ちでいいよ」

ギリツ、と聞こえるぐらい顔を歪ませる2人。

驚愕する他の生徒、そしてあたふたしているオールマイト。

大丈夫オールマイト？どうしたの？

「舐めてんのか……！」

「？ なんで？」

「なんで、だと……？」

「まあ、頑張りなよ。あくまで訓練だし」

「……後悔しても知らねえぞ」

「ぶつ殺してやらあ……！」

ただ1人、何が起ころか大体分かつたオールマイトは止めようとしたがこれも経験かとやめた。

――――――――――――――――――――

「嘘……だろ」

「何が起こったんだ!? おいおいおい！」

「轟くんの氷とかつちゃんの爆発、両方からきた攻撃に對して無傷、そして気付いたら既に移動していた……？ でも速すぎるし……。一体どういう個性なんだ……。体力テストの時もそうだつたし――」「神秘……闇であり闇を殺す者……」

結果は五条悟の圧勝であつた。

先に仕掛けたのはヴィラン側。

片方から轟の大出量の氷、反対からは爆豪の爆発という強烈な攻撃をお見舞いした。が、

『うーん、君達やる気ある?』

2人とも視界が晴れた時にはもう遅く、そこに五条の姿は無かつた。

『HERO TEAM Win!!』

訓練終了のアナウンスが、妙に甲高く響いていた。

親睦会

忘れられない記憶と言うものは誰にでもある。

どうでもいいことやイジメ、ふとした時にそれは頭によぎる。だけど時間が経つにつれて曖昧になつていき、本当にそれが起こつたことなのかな?と疑問に持つこともある。

でも、それでも・・・。

朧氣に覚えているのは、痛いという事と不味いと言うことだけ。ひきつった笑みで安心させようとするあんたが、足を震わせて立つてるあんたが、声が上擦つて恐怖に負けなかつたあんたが。朧氣でも、とてもなく輝いてたのを今でも覚えてる。これだけは、忘れられない。

ウチの原点オリジンだから。

――――――――――――――――――

きつかけは些細な事だった。

『そうだ、親睦会しよつか』

ヒーロー基礎学が終わつた日の放課後、五条悟は唐突に呟いた。
『確かに…これから長い間一緒に成長していく仲間なんだ。仲を深める事はヒーローとしても人としても大事なことだな!』

飯田くんが呟き、賛成の意見が広がつていく。

が、

『悪い。俺は行かない』

『俺も行かねえ』

轟、爆豪がこれを拒否する。

『いいの?折角僕の話をするのに。それに今日の反省、聞いてないで

しょ?』

五条悟の戦闘訓練が終わつた瞬間、オールマイトはダツシユで緑谷の所に向かつたという。

そのため授業はそのまま終了、2人は何がいけなかつたのかを聞いていな。

苦虫を噛み潰したような表情になる爆豪。

轟はそれでも無理だ、と告げようとする。

『……ちょっと待つてね』

五条は教室の外にでて、数秒後に戻つてきた。

『焦凍、許可は出たから行けるよ』

『……？誰にだ？』

『エンデヴァー』

『は？』

そんな事があり、あれよあれよと流されて現在の時刻は5時半。『ゴスト』と書かれた店にA組は全員集まつて席に座つており、後は五条悟のみという状態。

「にしても、親睦会か。俺こーいうのやつたことなかつたからなあと、陽気な切島が喋る。

「そ、うなん!? 切島くんの事だからやり慣れてると思つた」

「まあぶつちやけ、ここにいる俺達つてほとんど親睦会とかやつたことなくね? やつたことあるやつとかいんのかよ?」

「親睦会、ですか……。わたくし、制服でやるのは初めてです」

「へー、ヤオモモいつも何着てやつてたの?」

「着物とかドレスとかですね……。その国の人と合わせてましたから……」

((大金持ちッ!))

みんなが雑談している中、カラソカラソと扉の方から音が聞こえ、最後の1人がやつてきた。

「や、みんな。全員いる?」

「おせーぞ五条ー。みんなもう待つてんぞー?」

雄英の制服に、黒目隠しではなくサングラスをつけ参上した五条

は、笑いながらやつて來た。

「ま、いいじゃんいいじゃん。んじゃ、始めようか」

そこからは夕食を兼ねた雑談を始めた。

轟と爆豪に直すべき所をいい、相変わらず甘味しか食べないことを瀬呂にツツこまる。

そして、案の定この話題になる。

「そういうえば悟くんの個性って何？体力テストやヒーロー基礎学で使つてたけど、全く分からなんだよな一体どんな個性なのかな？」緑谷がそう呟くと、他の生徒も「気になる気になるーー！」「摩訶不思議な能力・・・興味がある」など様々な反応を示す。

「そうだね、課外授業といこうか。先ず言つておくと、僕のこれは個性じゃないよ」

「えつ!? 個性じゃない!?

ざわめきが起ころ。

「僕はヒーローじゃなくて呪術師つて前に言つたよね。確かに、僕は個性のようなものを持つてるよ。でも、呪術界ではそれを『生得術式』つて言うんだ」

「生得・・・術式・・・」

初めて聞く馴染みない単語に戸惑いつつも、きちんと覚えていく姿勢を見せるA組生徒。

「そ。名前通り生まれた時に体に刻まれているもの。だから呪術師になるためにはぶつちやけ才能が必要なんだよね」

「でも、個性と何が違うんだ？ 個性も同じだと思うが・・・」

「いい質問だね力動。そう、個性と術式は圧倒的に違うところがある。なんだと思う？出久」

「・・・使うために条件がいる、とかかな？」

「惜しい。正解は呪力を使うでした」

「呪力・・・?なんだそれ??」

「ざつくり言うと人の負の感情から生まれる力だね。怒り、嫉妬、怠惰とか」

人間のマイナスな感情である。

「なるほど、大体は理解したよ」

さて、と呴き本題に入ろうとする五条。

「僕の術式は無限。正確には「無下限呪術」って言うね」

「無下限・・・虚数とかのことですかしら?」

「そうそう。僕に触れようとして近づく度に無限が濃くなつて行く。要は僕に触れないってこと」

「「チートじやねえか?!」「

「ま、だつて僕——最強だからね」

笑いながら彼は平然と言う。

楽しい時間は直ぐに過ぎていく。

「そろそろお開きにしようか。じゃあ、お疲れサマンサー」
クラスが割り勘にしようと言つたが、五条は止め切る前に会計を済ませる。

星が見え始めた空を眺めつつ、五条は振り向かず喋る。

「どうかしたの?響香」

「・・・やつぱり、五条だよね」

どこか繰るような声に僕は振り向いて反応する。

「そうだよ。天才最強呪術師五条悟さんだよー」

「あんたはあの時」

冷たい声が響く。

否、疑問と驚愕が入り交じつた声が響く。

「死んだ筈じや、ないの・・・?」

「死んだ、か」

烈火のごとく響香の声が轟く。

「あんたは！あんたは！！あの時、ウチのせいで……うつ、うう……」
目を伏せ、頭を抱えた響香は、本当に憐くて。

【響香】

目を、顔を上げた響香の顔は酷かつた。
ぐしゃぐしゃで、砕けた硝子のようだ。

五条悟には耳郎響香に関する記憶がほとんどない。

『そんな顔してちや、折角の美人顔が台無しだよ。ヒーローは笑わな
きや』

そう言つて翻し帰路に着く。

『耳郎響香は五条悟の幼なじみ。死んでも必ず守りきれ』
これが彼とあと一人のみが知る、哀しい約束である。

委員長と謎

「学級委員長を決めてもらう」

「学校っぽいの来たアアアアア!!!」

親睦会を迎えた翌日。

朝からマスコミからオールマイトのことを聞かれたり、雄英ゲートという許可証を持つてない人間が雄英高校に入ろうした時に閉じる防壁が作動したりとハプニングがあつたけど、相澤先生はそう言つてきた。

「委員長!! やりたいですソレ俺!!」

「ウチもやりたいっす」

普通科なら雑務つて感じでこんなことにならないと思うけど、ここヒーロー科では集団を導くつていうトップヒーローの素地を鍛えられる役なんだ。

なんやかんな平等に投票で決めることになつたのだが。

「相澤先生、五条くんがいないんですけども・・・」

一つだけ空いている席。いつもは五条くんが座っているが今日はいない。

「・・・聞いてないのか。五条は今日出張だ」「出張つていいますと?」

はあ、とため息をつく相澤先生。

「アツ、言つてないのか。呪術師には階級が存在する。上から順に特級、一級、準一級、二級、準二級、3級、そして四級。五条悟は4人しかいない特級だ。当然危険な任務で出張が多くなる」「どうりであんな強い訳か・・・」

「あいつ、すげーんだな」

「とりあえず早く決めろ」

そして、投票の結果・・・

「僕 三票——!!?

結果はなんと緑谷出久であつた。

「じゃあ委員長緑谷、副委員長八百万だ」

—————

記録——2018年 4月

T県の山奥

「それにしてねえ」

鬱蒼とした山奥の中、五条悟は頂上を目指して歩いていた。
(空飛ぶ大型の顔を窓が確認した、か。)

内容を聞けば特級にも満たなそうだが、まあそれはいずれか分かることである。

聞くとこの山の頂上に向かつて言つたとの事。そして派遣された二級術師の行方が不明。恐らく死亡とのこと。

よつ、ほつ、と軽快に坂道を跳んで行く。
たとえなんであろうと呪霊は払わなければならぬ。

やがて、頂上の開けた所にでる。

「そこには廃れた神社と。なるほど、確かにこれは——」
突如顯になる存在感。

特徴的なものと言つたらその目だろう。

恐らく、目から百足が出ている。確かに大きい。

恐らく雄英高校の校舎半分くらいの高さの顔だな、と。
だがしかし。

「弱いな」

術式順転 「蒼」

顔面が一気に虚空に吸い込まれ、崩壊し、消滅していく。
謎だ。とは言え呪霊の行動に一貫性はない。
任務終了だと考え、スマホを手に取る。

「流石に無理か。ま、普通に帰るかな」

スマホの画面には圈外の2文字が。

ひとまず電波の通じる所へ移動して伊地知に連絡でもするか。そろそろ昼飯時、お腹も空いたし食堂へトぶか。

雄英高校の食堂へワープし

「いてえいてえ!!!」

「押すなって！」

「ちょっと待つて倒れる！」

人混みのなかに巻き込まれる。正確に言うと僕には触れていないけどね。

「あ、出久。ただいま。」

「五条くん?! いつの間に!?!」

「今帰ってきたんだけどさ、なにこれ」

「えーっと、警報がなつてみんなパニックになつて……っ！」

まるで濁流のなかにいるみたいだ。僕は動いてないけども。

そうこうしていると、出口の扉の上から聞きなれた声が。

「大丈一夫！」

天哉が大声で叫ぶ。

みんな段々と冷静を取り戻し、正しい行動を取るようになる。
さて、お昼ご飯でも食べようか。

そして放課後。

「委員長は、飯田くんがいいと思います！」

結局、委員長は飯田くんになった。

僕はあんな風にかつこよく人をまとめられる飯田君がやるのが正しいと思う。

こうして、飯田くんは委員長になつたのだ。
それにしてどうやって・・・。

—————

「ただのマスコミが、こんなこと出来る?」

先生達が細かくバラバラになつた雄英、ゲートの前に立つ。
濃い悪意はすぐ側まで来ている。そのことを、雄英は知らない。

過去と存在証明——①

五条悟の朝は早い。時もあるが遅い時もある。

気まぐれであり、自由奔放。

そんな彼だが今日はいつもより少し早く家を出た。

「♪♪

鼻歌交じりに道路を歩く。

朝とは言え人は多く、平和だと実感出来る。

「——ヒーロー助けてッ!!」

叫び声。すぐさまビルの屋上にトビ、当たりを見渡す。
道路の真ん中にヴィラン。そしてM tレディやシンリンカムイも
いる。がどうやら苦戦しているようだ。

人質をとられ、何も出来ないといつたところだ。
加勢するかと思ったが、英雄が目に映る。

「もう大丈夫だ、ファミリー」

N o・1ヒーローが

「何故なら私が、通勤がてら来た!」

この街は平和だと再認識する。

ま、僕もいるから世界一安全だけどね! —とこの男が考えたのは言う
までもない。

無論、この男も街の中にいる低級の呪霊を祓つている。

とはいえ今の世の中、直接的な害を与える呪霊はそうやすやすと現
れない。

できるだけ多くそれらを祓いたいが、現在の呪術師では追いつかな
いと言うのが現状である。

そうなると、この男が呑気に高校生活をする暇など無いはずであ
る。

それについては色々複雑な事情が絡んでいるのだが、それはまた別

の話。

A M : 11時11分

数学の授業中、聞きなれない音が流れ出した。

「なんの音だ・・・?」

「えーなになにアラーム?」

ピピピピピピと高速で鳴り響く音は、とても歪で、こちらを慌てさせるような音だった。

「ごめん、エクトプラズム、ちょっと席を外すよ」

五条悟が席を立ち、早足に教室を出る。

それが何か知っている先生は、一抹の不安を心に残しつつ、背中に声をかける。

「了解シタ。気ヲ付ケロヨ」

教室を出て、歩きながら出口に急ぐ。

ピピピピピピピ——ピ。

「もしもし、僕だけど」

『五条さん！不味いです！』

「どうしたの伊地知。そんな焦つて」

『特級呪靈、やしゃてんぐ廃射天?が活動を開始しました!!被害は2級2人、準1級1人死亡です!!!』

「場所は」

『それが地図上には存在していないんです！ですが呪靈の位置はメー
ルで送りました!!』

「了—解」

窓を開け真っ逆さまに宙を舞う。

景色と共に思考が早く流れ、決断する。

長距離の移動にはあまり適していないが、緊急事態のためだししようがないか。

「全く、これだから呪霊は」

「バシュンツ！」

まだ薄い緑が目立つ山々にを上空100mから見下ろす。

山の中腹、草木が生えておらず平べったく、そして何も無い土地にそれは居た。

デカい。山もデカいが廃射天？そのものも大きい。この前祓つた呪霊より遙かに大きい言つた所だろう。

「いつもいつも変な時に騒がせちゃつて。万年暇なの？」

ふわり、ふわりと空に沢山の紙が舞つている。

それらをよく見ると一枚一枚は少ないが、呪力が込められていたことが分かる。

恐らく古人が数百枚、数千枚と紙を用いて廃射天？を封印していたのだろう。

それが今になつて解けたと。

「そう考えるのが妥当かな。さてさて」

帳はもう既に降りている。

「今日は忙しいからね。ぱつぱと終わらせようか」

恐らく、向こうはこちらの存在に気付いている。

とりあえずあの厄介そうな胸元にある勾玉を何とかするか――

『落ちろ』

年老いた老人が無理をして若い声をだすような、少年が無理をして低い声をだしているような、そんな声が耳を通り、脳に入つてくる。突如ガグンつ、と凄まじい勢いで体が地面に向かう。

(呪言か。棘のように無条件に起つすのか?)

衝撃、そして遅れて音がやつてくる。

ダメージ自体は無いものの、そんじよそこらの特級呪霊ではない事

が伺える。

土煙が晴れ、目を向けるとそこには変わらず仁王立ちをしている呪靈がいた。

「うん、強いね。流石特級呪靈」

風がざわめき、枯れた葉が辺りに散らかる。

『貴様、新たな時代の呪術師であろう。先程の呪術師と違い、かなりの手練であると見る』

儂が屠つたがな、と言葉を耳にし当たりを見渡す。
死体らしいものはない。

屠つた、つまり殺した。

恨みなんてないし

「特級呪靈、廃射天？。君を祓う」
ワナワナと震え、口を開く。

『それは何故だ。何故我がお前に祓われなければならぬ』

（一人称が変わった？）

「君が呪靈で、僕が呪術師だから。人に害がある君を祓わなきやいけない」

『・・・』

沈黙。そして怒号。

『何故だ、何故、何故何故何故・・・』

老人、少年の他に様々な声が聞こえる。

高い声、低い声。震えている声、怒っている声。
まさか、この呪靈・・・。

「なるほど、道理でおかしいわけだ」

『領域展開』

廃射天？の後ろに大きな朱色の門が浮かび上がる。
グルンつ、世界が反転する。

上下左右逆に見え、門が近づく、否、落ちていく。

「これは・・・」

山だ。

先程までいた場所と違い、空は赤く染まり大量の呪力で満ちてい

る。

数千体の呪霊が空に居る。
言つてしまえば、大量の——天狗。

『天遊義譚』

過去と存在証明——②

天狗。

それは、日本の民間信仰において伝承される神や妖怪ともいわれる伝説上の生き物。一般的に山伏の服装で赤ら顔で鼻が高く、翼があり空中を飛翔するとされている。

日本では平安時代の頃には居たとされる妖怪だ。

厳密に言うと妖怪と呪霊はだいぶ異なる。妖怪とは、即ち人々の恐れから起こった現象事象などが意思を持ち存在すること指す。

一見すると同じに見えるが、在り方が違う。

呪霊とは、人々の負の感情が集い産まれた化物である。

そこに意思はなく、ただ人を害する物であるが故に呪術師は払わなければならぬ。

もつとも意思がないのは低級レベルの呪いの話だが。

「神とまで謳われた天狗が、呪霊に堕ちるなんてこりやまた傑作だね」それが人の思いだけで。

恐らく、この呪霊は全国各地にて伝承されてきた天狗達の負の遺産という所だろう。

村人などに恐れられ、恨まれ、憤怒の感情を向けられ呪われてしまつた。

かつて妖怪と言われ恐れられていた彼らだが、人々の思いで妖怪から呪霊に変貌したのだろう。

その小さな存在一体一体を集めて廃射天?になつたのだ。各々刀や槍、拳銃の果てに火縄銃を持つていて奴もいる。

ベタな所では葉っぱを持つてるやつもいるし。どうやって戦うんだよ。

恐らく、ここに来る前の山にあつた沢山の紙の1枚1枚に天狗が封印されていたに違いない。

かなりめんどくさい方法なのだが、一体全体誰がやつたのだろうが。

「いつまでもバタバタ飛んじゃつてまあ」

瞬間、空に浮き一匹の天狗の正面に立つ。

「僕が空に浮けないって思つてた？」

まるで豆鉄砲を食らつた鳩のよう。いや天狗だけど、

10発のハンチが1つの音になるほどの速さで鳴る

地の天河壁はその光景に驚き、それと開戦を見合ひ

他の天狗達はその光景に驚くが、それを開戦と見たら一斉に空へ這
んできた。

「直ぐに片付けないとね」

教師として仕事が残っているため、五条悟は今にてもはやこの案

何を解決するかぬい目の前の云猶道を駆逐し奴め

— — — — — — — — — —

五条語が頌或展開をされる前の頃。

雄英高校では、ヒーロー基礎学の授業が行われていた。

相澤先生やスペースヒーロー13号先生が引率で災害時の対応を学ぶため、水難事故、土砂災害、火事など、あらゆる災害救助でのヒーローとしての立ち振る舞いや個性使用の指導を行うことができるU.S.Jに来ていた。

「皆さん、待つてましたよ」

そういうスペースヒーロー13号が出迎える。

聞けばU.S.Jは13号を作つたらしい
一体全体どうやつて作つ

「一、台三九

文部省教科書圖版

そこから、13号の話が始まつた。

13号の個性は「ブラックホール」。救助などで活躍している能力だが、その実、人を容易く殺すことが出来る能力である。

生徒の中にも、他人を簡単に傷つける個性がいる。

一步間違えたら、それはヒーローではない。

だからその力を正しく使うことを、私たちヒーローは使わなければならぬ。

「——以上、ご清聴ありがとうございました！」

「ブラボー！！」「素敵！！」

13号のヒーローとしての言葉に心を打たれた生徒達は、彼に賞賛の言葉を送った。

「ここらで始めるか。そう思い相澤は指示を出す。

「うーし。そんじゃまずは——」

感。言うなれば、何となく。

しかし確信を持つて。

相澤の今までヒーローをやつてきた体が、いち早く反応し後ろを振り向いた。

例え話、強盗はこれから強盗しますなんて言うわけが無い。

ましてやそれが例えヴィランだとしても同じことが言えるだろう。

広場の真ん中にある空間に、気付けば濃い黒色の影のようなものがある。

そこからヴィランが蛆虫のように湧いてくる。

じわじわと。確実に数を増やしながら。

「13号！生徒を守れ！」

未だに何が起こってるか分かつてない生徒に、端的に告げる。

「動くな、あれはヴィランだ！」

社会の闇に潜んでいる影が、動きだした瞬間である。

明確な殺意を孕んで。

過去と存在証明——③

『うん、強いね。さすが特級呪霊』

数分前自分がそう言つた言葉。訂正せざるを得ないなこいつ。

弱い。特級の癖に弱すぎる。

それが五条悟が廃射天？に對しての印象であり、事実でもあつた。初めの呪言、あれは強かつた。ダメージは皆無だが狗巻家の術式のような効果で、自身にデメリットはなさそうだったからだ。領域展開もそうだ。多分、自分達が過ごした山を生成しつつ、大量の天狗で押し潰す。

おまけにこつちは謎の術式で無下限呪術が使えないときた。見当はついている。遠くでずーっとうじやうじや言つている奴らだろう。呪言の1種だが相当デメリットがあるはず。

しかし特に何も無いと見るに天狗たちの数でカバーしてゐるな。

そいつらを優先してボコボコにしても、すぐ様他の天狗が言葉を紡ぐ。よく出来た戦い方で。

弱いやつはよく群れる。しかし数は力にもなりうる事を、五条悟は知つてゐる。

その行く末も。

しかし結局雑魚は雑魚なのだ。

五条悟が廃射天？と遭遇してから恐らく10分。

廃射天？は、現在進行形で——

「ガア！ シヤアアアア！」

「煩い、邪魔」

ボコボコにされていた。

完膚なきまでに、もうどうしようもないほどに。

剣、槍、斧を初めとした近接武器も。

弓、風の刃、火縄銃などの遠距離武器も。

当たらないし、そもそも練度が低い。

いくら長い年月生きてたであろうが、道を知らぬものがその道を進めば迷うのは必然のことであろう。

ただがむしやらに切りつけ、刺し、叩き潰す。

矢を放ち、風を操つても、呪力でできた硬質な弾を飛ばしても。その程度の技なんぞ現代の最強にとつては無に等しい。術式が使えないとしても、素の実力が桁違いなのだから。片つ端から殺し続け、恐らく半分は超えたであろう。

ふと、天狗達が空中で留まり、バサバサと羽の音が辺りに響く。バサ、バサ。

「そんなもんかよ。なんで封印されたの？」

ふと気になつたので聞いてみる。五条悟からしたら雑談。しかし、はたから見たら殺し合いの中相手に喋りかけるヤバいやつである。

天狗たちが喋りだす。

「我等を」「女」「封じたのは」「忌々しい」「あの女は美味かつたなあ」「巫女」「龍だつた」「頭に傷」

全員が全員、勝手に喋りだすからまるで意味がわからない。「にしても、昔の人は馬鹿なんだねえ。君達みたいな鳥合の衆を封印するんだって」

五条悟は自信が認める性悪である。

「別に弱いから封印なんてしなくていいのにね」

につこり。パークエクトスマイル。

ほんつつとうにいい笑顔だ。

言われた天狗たちの顔が怒髪天をつくぐらいブチ切れてるのを見なければだが。

先程までバラバラに喋つていた天狗たちが、口を揃え呪う。

「「「貴様を殺す」」」

「やつてみろよ鳥カスどもが」

阻害感が消えたことを感じ全員捻り潰すため術式を使おうと術式に呪力を流す。

が、しかし。

(急に暗くなつた…。なにか仕込んでたな)

一瞬にして山は暗く、そして辺りに静寂が訪れた。

暗い暗い山の中、木々がうつそうと辺りに生え散らかしている。隙間から見える、空に浮かぶ赤い満月が歪だが綺麗だつた。

ボウツ、と正面から音がする。

見てみると、いつの間にできたのであろうか。自分の前方部に開けた広場ができており、なにかは分からないが燃えている事に気付く。シャン…。シャン…。

そして何者かが歩い来ている。

暗くてよく見えないが、その呪力量は六眼越しに見える。先程まで相手していた鳥共より遙かに多い。

カシヤン…。ガシヤン…。

金属が揺れる音がする。

月明かりが煌びやかな勾玉を映し出す。あれは廃射天？が身に着けていたものと同じだろう。

「それが奥の手かな」

鎧は体を完全に包み込んでおらず、中途半端になつてている。見て察する。あれは必要最低限の防具だと。

守りに点を置かず、身軽さに置いたのであろう。

そして、腰に下げている刀。

かなりいい呪具だ。そこそこ強いつてところか。

『ぎぞうてんぐ偽造天狗・源義経』

真名か。随分とまたビックネームじゃないか。

「ふむ、なるほどね。かつて天才と言われた武者か」

さて。勘のいい皆様ならお気付きだろう。

廃射天？はミスを犯した。

群れは弱い。知つているとも。

ならばどうする。簡単だ。目の前のやつを真似ればいい。

強力な、絶対的な一で敵対者を叩き潰す。

しかし、だ。結局それは相手が同じ1なら成り立つ話であつて――

「無駄だよ、それ」

瞬間、五条悟に飛び掛る8つの影

術式解放

「影舞散佚」

刀から飛び出した七体の分身。その実力は術者本人より少し弱い程度であるが相手に理不尽な手数で押し潰す武器。

一人一人が絶対に避けれない場所へと斬撃を振り下ろす。首、手、足、喉、胴、心臓、背中など。

360度から迫る漆黒の刀。

ビタツ

それが!!!!止まる。

「「「「「「?!」」」」」

「終わりだ」

その咳きに、源義經…。いや、廃射天？は反射的に逃げようとした。もう一部の弱きものは察していた。

呪具が止められた時。

領域——天遊義譚に引きずつて同士が何も出来ず死んでいく時。何も、見えない。

勝てる未来なんて存在しない。

ゾワリと。

呼吸が早くなり、懐かしい感覺に襲われる。

それは、本来自分達が持たれるはずの恐怖という感情であつた。

深く、深く。これ程練られた呪力は見たことがない。圧倒的な呪力。

量は多いが、それほどではない。むしろこのレベルなら昔見たことすらある。

しかしその圧、その質量。例えるなら完璧。

磨き上げられた宝石のように、とても美しい——。

痛みはなかつた。何故なら一瞬で体が塵と化したから。

廃射天？は、何も出来ずに消し飛ばされた。

――――――――――――――――

「はー終わつた終わつた。まあ、この強さなら納得かな」

「早く帰らないと一つと」

「それにしても蛇かなーんか心残りがあ

「五条だよーん！なに伊知地」